

## 青年期発達と時間的展望

—時間的展望研究の動向と課題—

石井 僚<sup>1) 2)</sup>

自分は何者かという問いの探求、そして生き方の決定が求められる青年期においては、現在を見つめ、過去を振り返り、未来を展望することが必要である。なぜなら、人間は、過去から現在、そして未来へとつながる流れの中で生きており、その統合こそが、自分は何者であるか、自分がどのように生きていくのかを形作っていくと考えられるからである。木村(1982)も、その著書「時間と自己」の中で、時間が時間として流れているという感じと、自分が自分として存在しているという感じとは、同じことであると述べている。時間的展望は、青年期において重要な、過去、現在、未来といった時間を心理学的に説明する概念である。本論文では、時間的展望の定義から近年の重要な研究知見までレビューを行い、時間的展望の観点から青年期発達を明らかにするための今後の課題について提案することを目的とする。

### 時間的展望とは

時間的展望に関する心理学的研究が始まったのは、1930年代に入ってからとされる(都筑, 2007, 2011)。時間的展望(time perspective)という言葉は、Frank(1939)によって初めて用いられた。その後Lewin(1951 猪股訳 1979)がFrank(1939)を引用しながら、時間的展望を場の理論の中に位置づけ、「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体」(p. 86)と定義している。現在においてもこの定義が一般的に使用されている。

時間的展望は、個人の現在の行動を説明するために場の理論に組み込まれた概念である。Lewin(1951 猪股訳 1979)は、生活体と環境とが相互関連している1つの場の構造を生活空間と捉え、その構造が、ある一定時の行動を規定する条件の総体であるとしている。個人の行動は、全面的に現在の事態に依存するものであるが、現

在の事態には時間的な広がりがあり、希望や願望、あるいは自分の過去の見解などによって影響されるとしている。総じて時間的展望は個人の現在の行動に影響を与えるものとして概念化がなされているのである。

### 時間的展望の次元

Lewin(1951 猪股訳 1979)によれば、心理学的生活空間内において、時間的展望は2つの次元を持つとされる。1つは長さ(scope)の次元、もう1つは現実性(reality)の次元である。前者はどの程度前のこと、もしくはどの程度先のことが、現在の個人の行動に影響を及ぼすかというものであり、後者は、事実と願望、希望と期待といったような違いを生むものであり、これもまた現在の個人の行動に影響を与えるものである。Lewin(1951 猪股訳 1979)が当初想定していた時間的展望の次元はこの2次元であった。

しかし研究の進展と共に、時間的展望には多くの側面が存在することが明らかとなる。Wallace(1956)は、長さの次元に加え、概念化された未来の中における組織化の程度として、一貫性の次元を提唱している。他にも、個人が未来に予想する出来事や経験の数といった密度の次元(Kastenbaum, 1961)、過去、現在、未来のどの時間に対する志向性が強いかという方向性の次元(Klinsberg, 1967; Teahan, 1958)、あるいはそれらの時間がどの程度関連性を持って捉えられ、統合されているかという連続性の次元(Cottle, 1967)などが提唱され、それぞれの測定方法も開発されている。都筑(1982)は、こうした多くの研究を概観し、時間的展望の次元を、認知的側面と情緒的側面に分けて整理している。

### 時間的展望の発達

時間的展望は、生まれたときから個人が持っているものではない。Lewin(1951 猪股訳 1979)は、時間的展望の発達は、遠い未来と過去の事象が、徐々に現在の行動に影響を及ぼすようになると同時に、願望と実在との間の区別がよくできるようになることとしている。つまり時間的展望の長さの拡大と、現実と非現実の分化の増大である。また、こうした時間的展望の発達は、認知構

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程(後期課程)(指導教員:氏家達夫教授)

2) 日本学術振興会 特別研究員

造の変化の一類型とみなすことができるとし、発達の根本的側面の1つとして重視している (Lewin, 1951 猪股訳 1979)。

時間的展望の発達は、認知的能力の発達を基盤にしていると考えられる。Piaget (1946/1969) は、論理的思考の発達の一側面として時間概念の発達を検討し、およそ児童期にあたる具体的操作期において時間概念が獲得されていることを示した。また、発生的認識論 (Piaget, 1970 滝沢訳 1972) によれば、およそ11, 12歳以降を迎える形式的操作期において、現実を可能性の中の1つとして捉えることができるようになるとされる。将来に関することをより現実性を伴って認識できるようになるため、未来が現在の行動に対して意識的に影響を持つようになると考えられる。個人の時間的展望は、認知的能力、特に論理的思考の発達に支えられながら、発達していくと考えられる。

#### 時間的展望研究の領域

時間的展望は様々な領域と関連しており、心理学の中でも多様な分野において研究が進められてきた。その代表的な1つは、臨床心理学領域である。時間的展望に関する研究の最初期において、Israeli (1935) は、失業中の青年が持つ将来展望が、精神疾患患者と同様に悲観的であることを明らかにしている。都筑 (2007) は、この研究の背景には、Janet (1929/1955) やMinkowski (1933/1972, 1973) の行った精神病理学的な視点からの時間に関する考察があったと述べている。その後もWallace (1956) の行った統合失調症患者の未来展望についての検討を筆頭に、最近においても、不安障害や自殺 (Rector, Kamkar, & Riskind, 2008)、ネット依存 (Chittaro, & Vianello, 2013)、心的外傷後ストレス障害の治療 (Sword, Sword, Brunskill, & Zimbardo, 2014) といった特定の疾患に対しての研究や、難民の精神的健康 (Beiser & Hyman, 1997)、ホームレスの抑うつ (Pluck, Lee, Lauder, Fox, Spence, & Parks, 2008) といった特定の対象を扱った研究など、臨床領域において多くの研究がなされてきている。

臨床領域と同様に蓄積の多い領域が、動機づけの研究領域である。未来展望が動機づけを高めるとするFuture Time Perspective Theory (Nuttin, 1984; Nuttin & Lens, 1985) が提唱されて以来、多くの研究が行われてきた。この理論に関しては既にSimons, Vansteenkiste, Lens, and Lacante (2004) によってレビューがなされている。それ以降のより最近の研究では、この理論に基づいて生徒の動機づけを縦断的に検討したものや (Schuitema, Peetsma, & van der Veen, 2014)、社会経済的地位も考慮に入れて学校での適応的行動との関連を検討したもの

(Carvalho, 2015)、キャリアの決定との関連を調整する感情状態の効果 (Jung, Park, & Rie, 2015) など、より詳細で複雑な影響についての検討が進められている。

時間的展望の持ち方は個人差変数であると同時に、様々な変数によって影響を与えられるものであり、その他多くの側面についても研究が進められている。そうした研究において世界的に多く用いられている尺度が、Zimbardo and Boyd (1999) の開発したZimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI) である。Zimbardo and Boyd (1999) は、時間的展望について、個人の経験を、過去、現在、未来という時間の枠組みに分離する認知プロセスから生じるもので、心理的時間を構成する基本的な側面としている。そして一貫した測定尺度をもって議論を行うべきであると主張し、ZTPIが開発された。日本 (下島・佐藤・越智, 2012) を含む各国においても翻訳版が作成され、同様の因子構造が確認されている。ZTPIの開発によって、その後多くの研究が蓄積されてきているが、近年では特に、バランスの取れた時間的展望 (Balanced Time Perspective) の重要性について実証が積み重ねられている (e.g. Garcia & Ruiz, 2015; Shirai, Nakamura, & Katsuma, 2012; Stolarski, Matthews, Postek, Zimbardo, & Bitner, 2014; Stolarski, Vowinckel, Jankowski, & Zajenkowski, 2016)。

#### 青年期発達と時間的展望

時間的展望は、青年期発達にとって欠かせないものである。Erikson (1959 小此木訳 1973) のライフ・サイクル論によれば、青年期はアイデンティティの確立が発達課題となる時期である。アイデンティティとは、個人が自分の内部に斉一性と連続性を感じられることと、他者がそれを認めてくれることの、両方の事実の自覚であるとされる。都筑 (1993) は、アイデンティティの達成は、過去、現在、未来の時間的な流れの中での自己についての継続性や統合性の意識の上に初めて成り立つものであるため、その基礎には時間的展望の確立が必要であるとしている。また都筑 (2007) は、Erikson (1959 小此木訳 1973) の漸成図式において、青年期にはアイデンティティと同様、時間的展望対時間的展望の拡散が重要な発達課題とされていることを指摘し、時間的展望は青年期発達を論じる際に重要なものとしている。実際に、Erikson (1959 小此木訳 1973) の第V段階の部分症候の記述に基づいて作成された同一性混乱尺度 (砂田, 1979) には、時間的展望の混乱が含まれている。時間的展望は、アイデンティティと深く関係しており、青年期発達にとって重要な概念と考えられる。

先述した通り、論理的思考が発達する青年期は、時間

的展望の獲得期といえる。白井(1985)は、小学生、中学生、高校生を対象として調査を行い、将来に起こると思う事象とその年齢について尋ねた。その結果、想起された最も遠い将来の事象までの距離は、年齢とともに長くなっていくのに対し、想起された各事象までの距離の中央値は、小学生より中学生、高校生の方が短く、特に小学生と中学生の間には大きな差が見られた。また、白井(1985)は、児童期よりも青年期の方が、現在と未来とのつながりを持っていることも指摘している。都筑(2008)が小学校4年生から中学校2年生を対象に行った縦断研究からも、思考の発達によって、自分や周囲を現実的、客観的に捉えることができるようになることが示されている。認知能力の発達を基盤として、青年期に時間的展望が獲得され、アイデンティティの探求が進むと考えられる。

時間的展望とアイデンティティとの関連については、多くの研究が積み重ねられてきた。そうした研究の多くは、Marcia(1966)のアイデンティティ・ステータスの観点からなされている。アイデンティティ・ステータスとは、自分のアイデンティティに関する事柄について、積極的に関与できると感じられるもの(コミットメント)を持っているか、およびコミットメントの様々な選択肢について思案したか(探索)という基準によって、達成、早期完了、モラトリアム、拡散という4つの地位に分類するものである。Rappaport, Enrich, and Wilson(1985)は、達成地位と早期完了地位は、拡散地位やモラトリアム地位に比べて未来への指向性が高いことを見出している。都筑(1993)も、達成地位の青年は、過去・現在・未来を統合しており、未来指向的であったとしており、また達成地位のそうした未来展望は肯定的であることも示されている(都筑, 1994)。未来の機会を探索し、目標を定め、それを達成するとき、同時にアイデンティティは発達するとされる(Nurmi, 1991)。近年の研究においても、Laghi, Baiocco, Liga, Guarino, and Baumgartner(2013)では、達成地位は未来指向的で肯定的な過去展望を持つ一方、拡散地位の過去は否定的であると同時に、未来への指向性は低く、運命論的な考え方をしがちであることが示されている。Shirai, Nakamura, and Katsuma(2012)では、バランスの取れた時間的指向性がアイデンティティ確立と関連するとしている。これまでの研究では総じて、アイデンティティ達成地位において各時間の統合が進んでおり、未来指向的で肯定的な展望を持っていることが示されている。人生の選択肢や目標、計画等に関する決定を現実的に行う能力が向上することで、青年の未来への意識は増加していくと考えられており(Greene, 1986; Poole & Cooney, 1987)、認知能力の発

達に伴う未来指向的かつ肯定的な将来展望が、アイデンティティ確立の基礎となっていると考えられる。

## 青年期発達と時間的展望に関する研究の今後の展望

### アイデンティティ形成のプロセスとプロダクト

中間(2011)は、アイデンティティに関する研究がこれまで、アイデンティティ達成地位(Marcia, 1966)やその程度(Rasmussen, 1964)について多く検討されてきたが、近年では、アイデンティティがいかにかに形成されるかというプロセスへの関心(杉村, 2005)も高まっていると述べている。アイデンティティ・ステータスに関しては、アイデンティティ達成地位から別の地位への移行が起こることが示されており(Stephen, Fraser, & Marcia, 1992)、アイデンティティの探索は繰り返し起こることが明らかとなっている。つまり、アイデンティティ・ステータスは、繰り返されるアイデンティティ探求のプロセスの途上を表しているにすぎないと考えられる。それにも関わらず、アイデンティティ・ステータスのモデルでは、個人を分類することに主眼が置かれているため、各ステータスにおけるコミットメントや探求の状態について詳細な検討ができない。青年期の発達課題であるアイデンティティの確立と、時間的展望との関係を理解するためには、より詳細な形成プロセスと時間的展望との関連を検討していく必要がある。

アイデンティティの形成プロセスに関しては、いくつかの代表的な理論が提唱されている。1つは、Luyckx, Goossens, and Soenens(2006)およびLuyckx, Goossens, Soenens, and Beyers(2006)の提唱したアイデンティティ形成の二重サイクルモデルである。この理論においては、アイデンティティの発達プロセスは、コミットメント形成のために多様な選択肢を探索するプロセスと、既に選択した対象についてさらに検討し、コミットメントを深めていくプロセスからなるとされる。そのそれぞれはさらに、広い探求とコミットメント形成、深い探求とコミットメントとの同一化に分けられている。その他にも代表的な理論として、アイデンティティ形成の3次元モデル(Crocetti, Rubini, & Meeus, 2008)などがある。このモデルでは、コミットメントを形成し、その形成したコミットメントを維持するために深い探求を行い、さらにそのようにして一旦形成したコミットメントを見直して再構成するプロセスがあると仮定される。つまり、コミットメント、コミットメントに対する深い探求、コミットメントの再考という3側面からなるサイクルとして、アイデンティティの形成プロセスを捉えている。こうした代表的な理論に基づき、時間的展望とアイデン

ティティ形成プロセスとの関連を明らかにしていくことが必要と考えられる。

青年期発達と時間的展望について、アイデンティティの観点から検討する際には、アイデンティティの形成プロセスのみでなく、そのプロセスを経て生み出されるプロダクトと合わせて検討する必要がある。先述してきた通り、これまでのアイデンティティ研究では「できあがった結果としての」斉一性・連続性の感覚を捉えてきた一方、近年のプロセスやメカニズムを捉えようとする研究では、斉一性・連続性の感覚を維持していく「営みあるいは働き」を捉えている(杉村, 2008)。前者はプロダクト、後者はプロセスとして弁別して捉えられている(畑野・杉村・中間・溝上・都筑, 2014; 溝上, 2008)。しかし、後者のようなアイデンティティの形成プロセスは、前者のプロダクト、つまり斉一性・連続性の感覚に依拠して異なる意味や働きを持つ可能性がある。例えば、斉一性・連続性の感覚がまだ不明確な段階ではいろいろな選択肢を模索することは肯定的な意味を持つが、明確になってきた段階では自身の決定が揺らぐなど、異なった働きを持つかもしれない。Schwartz (2007) も、前者のようなプロダクトと、後者のようなプロセスの両側面からアイデンティティを理解していくことの重要性を指摘している。つまり、アイデンティティ形成のプロダクトとプロセスの両側面から検討することで、青年期発達と時間的展望の関連がより明確にできると考えられる。

#### 未来への偏重と現在や過去

青年期は、認知発達に支えられながら、進学、就職、結婚といった関心事を持つ文脈によって未来展望が広がり、またそうした未来展望が、アイデンティティ形成等青年期発達にとって重要であることが示されてきた。しかしその一方で、時間的展望研究は未来にばかり関心を向けており、研究対象が未来に偏重していることが古くから現在に至るまで指摘され続けている(Goldrich, 1967; 石川, 2014; Zimbardo & Boyd, 1999)。Lewin (1951 猪股訳 1979) の定義にもある通り、未来のみでなく、過去を含め、検討を進めていく必要がある。

過去に関する研究は、未来に関する研究に比べて多くはないものの、一定の蓄積がなされてきている。青年期は未来指向的であることが指摘されながらも、過去に思いを巡らせることも多いことが指摘されており(Mello, Worrell, & Andretta, 2009)、このような過去の想起が未来展望と関連することも明らかにされている(日渥・齊藤, 2007)。さらに石川(2014)では、過去の捉え方によって、目標意識の特徴に差異が見られることが明らかにされている。しかし、過去の時間的展望が、青年期発達とどのように関わるのかについては未だ明確にされていない。

やまだ(2000)は、物語としての自己という見方について論じる中で、物語を語り直すことによって過去は再構成されることや、アイデンティティの概念と関連づけられることを指摘している。また白井(2001a)も、過去を回想することが進路選択に影響を及ぼすこと、またそこにアイデンティティが関係していることを示している。今後はより直接的に、過去の時間的展望がアイデンティティや青年期発達とどのような関連を持つのかについて明らかにしていく必要があるだろう。

現在という時間についてはさらに議論が必要な状態と思われる。そもそもLewin (1951 猪股訳 1979) の定義には、心理学的過去と心理学的未来については記述があるものの、現在という時間については言及されていない。しかし、Lewin (1951 猪股訳 1979) が定義をする際に引用をしているFrank (1939) では、未来展望や過去展望を持つことは、現在を起点としていることが指摘されており、白井(2008)や都筑(1999)も同様の言及をしている。Lewin (1951 猪股訳 1979) の定義に照らしても、現在の時間についてどのような態度を持っているかなどが、現在の行動に影響を与えるのは想像に難くない。実際に白井(1994)の作成した時間的展望体験尺度の1下位尺度には現在の充実感という現在の時間に関する態度を測定するものが含まれている。未来や過去の起点であり、我々が体験できる唯一の時間である現在は、時間的展望研究において重要な1要素であると考えられる。

現在に関する時間的展望の研究が十分に進展してこなかった理由として、概念や測定方法に関する問題が起因している可能性がある。例えば、先述した通り、青年が未来指向的であるとする研究は多く見られるが、こうした指向性については、個人が過去、現在、未来のどれか1つの時間に対する指向性のみを持つとする研究(白井, 1997)と、複数の時間に対する指向性を持ち得るとする研究(河野, 2003)がある。前者のような立場に立てば、青年期が未来指向的だとした場合、その他の指向性は検討することができない。こうした概念定義の相違を整理し、未来ばかりでなく現在にも焦点を当てて検討する必要がある。また、測定方法に関しても未熟さがあると思われる。時間的展望研究において世界的に広く用いられているZTPI(Zimbardo & Boyd, 1999)では、現在に関する下位尺度が2つ含まれてはいるものの、その2つともが否定的な側面に焦点を当てている。しかし園田(2003)や白井(1997)では、現在の時間的展望の肯定的な意味や働きも見出されている。

現在に関する時間的展望の肯定的側面は、ごく最近の研究によって少しずつ着目されるようになってきている。Vowinckel, Westerhof, Bohlmeijer, and Webster

(2015) は、現在の経験できる唯一の時間である現在に着目する意義について論じた上で、その測定尺度を開発している。また Worrell, Mello, and Buhl (2013) も、時間的展望の態度的側面について、現在という時間に対する肯定的態度と否定的態度の両方を測定することのできる尺度を開発している。また、尺度の開発だけでなく、Taber and Blankemeyer (2015) は実際に、職業におけるアイデンティティと現在という時間を含めた時間的展望についての関連を検討している。その結果、アイデンティティの拡散地位は、過去の否定的な展望、未来への指向性の低さと関連している一方、達成地位は、現在を受け入れ楽しむといった肯定的な現在への見方と関連していることが示されている。過去、現在、未来それぞれの時間的展望と、青年期発達との関連について検討を進めていくことが、今後の課題としてあげられる。

#### 終点を踏まえた人生全体の時間という視点

青年は未来の中でも比較的近い未来について考えることが一般的とされる一方 (Nurmi, 1989)、人間は生の究極の到達点である死の日まで、自分に与えられた時間をいかに生きていくのかを考えることが必要とされる (デーケン, 2001)。白井 (2001b) は、人間は時間的な広がりができはじめるなかで、1回しかない現在のかげがえのなさに気が付くとし、人生の有限性や死の認識は、生きる意味や今を生きることの大切さについても考えさせるとしている。死までの未来というより大きくて広い展望を持つことが、青年の生き方、つまりアイデンティティ形成といった青年期発達に関わると思われる。

死までの時間的展望という見方は、これまでの時間的展望研究でも扱われてきたものである。Cottle (1976) はライン・テストという測定方法を開発している。この方法は、時間の流れを表す1本の横線に、研究参加者が、産まれたとき、死ぬとき、そして現在の境界について印をつけてもらうというものであり、自分自身の死までの時間的展望の測定が試みられていることが分かる。他にも、特に中年期以降においては、死までの時間的展望に関する研究が積み重ねられてきている。なぜなら、中年期以降では身体の衰え等から死への気付きが起これ、あとどれくらい生きることができるかという視点を持つためである。そのため中年期は、それまでの未来指向から現在指向へと変わる時間的展望の転換期とされている (日濁・岡本, 2008; 白井, 1997)。一方で、青年期を対象とした実証的研究は見当たらないのが現状である。

しかし、死までの時間的展望という視点は青年期においても検討の必要がある。上述したデーケン (2001) や白井 (2001b) に加えて、Carstensen (2006) は、Socioemotional Selectivity Theory を提唱している。こ

の理論においては、人間は時間の有限性を知覚すると、人生の中で満足や達成、感情的な意味を見出すことに高い重要性を置くようになるとされる。死までの時間的展望は、人生の有限性を踏まえた時間的展望であり、自分自身の生き方について考えることが課題である青年に対して、発達のな影響を与えると考えられる。ハイデガーの「存在と時間」を中心的に分析した魚谷 (2002) も、死へとかかわる存在を自覚することで自己は本来的自己となると述べている。自分自身の死までの時間的展望を持つこととアイデンティティ形成等の青年期発達との関連について、心理学的に実証していくことが今後の課題の1つと考えられる。

## 引用文献

- アルフォンス・デーケン (2001). 生と死の教育 岩波書店
- Beiser, M., & Hyman, I. (1997). Refugees' time perspective and mental health. *American Journal of Psychiatry*, *154*, 996-1002.
- Carstensen, L.L. (2006). The influence of a sense of time on human development. *Science*, *312*, 1913-1915.
- Carvalho, R.G.G. (2015). Future time perspective as a predictor of adolescents' adaptive behavior in school. *School Psychology International*, *36*, 482-497.
- Chittaro, L., & Vianello, A. (2013). Time perspective as a predictor of problematic Internet use: A study of Facebook users. *Personality and Individual Differences*, *55*, 989-993.
- Cottle, T.J. (1967). The circle test: An investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, *31*, 58-71.
- Cottle, T.J. (1976). *Perceiving Time*. New York: John Wiley & Sons.
- Crocetti, E., Rubini, M., & Meeus, W. (2008). Capturing the dynamics of identity formation in various ethnic groups: Development and validation of a three-dimensional model. *Journal of Adolescence*, *31*, 207-222.
- Erikson, E.H. (1959). *Psychological issues: Identity and the life cycle*. New York: W.W. Norton.
- (エリクソン, E.H. 小此木啓吾 (訳) (1973). 自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル—誠信書房)
- Frank, L.K. (1939). Time perspective. *Journal of Social*

- Philosophy: A Quarterly Devoted to a Philosophic Synthesis of the Social Sciences*, 4, 293-312.
- Garcia, J.A., & Ruiz, B. (2015). Exploring the role of time perspective in leisure choices: What about the balanced time perspective? *Journal of Leisure Research*, 47, 515-537.
- Goldrich, J.M. (1967). Study in time orientation: Relation between memory for past experience and orientation to future. *Journal of Personality and Social Psychology*, 6, 216-221.
- Greene, A.L. (1986). Future-time perspective in adolescence: The present of things future revisited. *Journal of Youth and Adolescence*, 15, 99-113.
- 畑野 快・杉村 和美・中間 玲子・溝上 慎一・都筑 学 (2014). エリクソン心理社会的段階目録 (第5段階) 12項目版の作成 心理学研究, 85, 482-487.
- 日潟 淳子・齊藤 誠一 (2007). 青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連 発達心理学研究, 18, 109-119.
- 日潟 淳子・岡本 祐子 (2008). 中年期の時間的展望と精神的健康との関連—40歳代, 50歳代, 60歳代の年代別による検討— 発達心理学研究, 19, 144-156.
- 石川 茜恵 (2014). 青年期における過去のとらえ方タイプから見た目標意識の特徴—時間的展望における過去・現在・未来の関連— 発達心理学研究, 25, 142-150.
- Israeli, N. (1935). Distress in the outlook of Lancashire and Scottish unemployed. *Journal of Applied Psychology*, 19, 67-69.
- Janet, P. (1929). *L'Évolution psychologique de la personnalité*. Paris: Chahine.  
(ジャンネー, P. 関 計夫 (訳) (1955). 人格の心理的発達 慶應義塾大学出版会)
- Jung, H., Park, I.J., & Rie, J. (2015). Future time perspective and career decisions: The moderating effects of affect spin. *Journal of Vocational Behavior*, 89, 46-55.
- Kastenbaum, R. (1961). The dimensions of future time perspective: An experimental analysis. *Journal of Genetic Psychology*, 65, 203-218.
- 木村 敏 (1982). 時間と自己 中央公論新社
- Klineberg, S.L. (1967). Changes in outlook on the future between childhood and adolescence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 187-191.
- 河野 莊子 (2003). 青年期事例における時間的展望の現れ方とその変化—不登校を主訴として来談した2事例をもとに— 心理臨床学研究, 21, 374-385.
- Laghi, F., Baiocco, R., Liga, F., Guarino, A., & Baumgartner, E. (2013). Identity status differences among Italian adolescents: Associations with time perspective. *Children and Youth Services Review*, 35, 482-487.
- Lewin, K. (1951). *Field theory in social science*. New York: Harper & Brothers.  
(レヴィン, K. 猪股 佐登留 (訳) (1979). 社会科学における場の理論 (増補版) 誠信書房)
- Luyckx, K., Goossens, L., & Soenens, B. (2006). A developmental contextual perspective on identity construction in emerging adulthood: Change dynamics in commitment formation and commitment evaluation. *Developmental Psychology*, 42, 366-380.
- Luyckx, K., Goossens, L., Soenens, B., & Beyers, W. (2006). Unpacking commitment and exploration. *Journal of Adolescence*, 29, 361-378.
- Marcia, J.E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- Mello, Z.R., Worrell, F.C., & Andretta, J.R. (2009). Variation in how frequently adolescents think about the past, the present, and the future in relation to academic achievement. *Research on Child and Adolescent Development*, 2, 173-183.
- Minkowski, E. (1933). *Le temps vécu*. Paris: J. L. L. d'Artrey.  
(ミンコフスキー, E. 中江 育生・清水 誠・大橋 博司 (訳) (1972, 1973). 生きられる時間1・2 みすず書房)
- 溝上 慎一 (2008). 自己形成の心理学—他者の森を駆け抜けて自己になる— 世界思想社
- 中間 玲子 (2011). 青年の時間 子安増生・白井 利明 (編) 発達科学ハンドブック 第3巻 時間と人間 (pp.98-112) 新曜社
- Nurmi, J.E. (1989). Development of orientation to the future during early adolescence: A four-year longitudinal study and two cross-sectional comparisons. *International Journal of Psychology*, 24, 195-214.
- Nurmi, J.E. (1991). How do adolescents see their future? A review of the development of future orientation and planning. *Developmental Review*, 11, 1-59.
- Nuttin, J.R. (1984). *Motivation, planning, and action: A relational theory of behavior dynamics*. Hillsdale: Erlbaum.

- Nuttin, J., & Lens, W. (1985). *Future time perspective and motivation: Theory and research, method*. Leuven: Leuven University Press, and Hillsdale: Erlbaum.
- Piaget, J. (1969). *The child's conception of time*. (A. J. Pomerans, Trans.) London: Routledge & Kegan Paul. (Original work published 1946)
- Piaget, J. (1970). *L'épistémologie génétique*. Paris: Presses Universitaires de France.  
(ピアジェ, J. 滝沢 武久 (訳) (1972). 発生的認識論 白水社)
- Pluck, G., Lee, K.H., Lauder, H.E., Fox, J.M., Spence, S.A., & Parks, R.W. (2008). Time perspective, depression, and substance misuse among the homeless. *Journal of Psychology*, *142*, 159-168.
- Poole, M.E., & Cooney, G.H. (1987). Orientations to the future: A comparison of adolescents in Australia and Singapore. *Journal of Youth and Adolescence*, *16*, 129-151.
- Rappaport, H., Enrich, K., & Wilson, A. (1985). Relation between ego identity and temporal perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, *48*, 1609-1620.
- Rasmussen, J.E. (1964). Relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, *15*, 815-825.
- Rector, N.A., Kamkar, K., & Riskind, J.H. (2008). Misappraisal of time perspective and suicide in the anxiety disorders: The multiplier effect of looming illusions. *International Journal of Cognitive Therapy*, *1*, 69-79.
- Schuitema, J., Peetsma, T., & van der Veen, I. (2014). Enhancing student motivation: A longitudinal intervention study based on future time perspective theory. *Journal of Educational Research*, *107*, 467-481.
- Schwartz, S.J. (2007). The structure of identity consolidation: Multiple correlated constructs of one superordinate construct? *Identity: An International Journal of Theory and Research*, *7*, 27-49.
- 下島 裕美・佐藤 浩一・越智 啓太 (2012). 日本版 Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI) の因子構造の検討 パーソナリティ研究, *21*, 74-83.
- 白井 利明 (1985). 児童期から青年期にかけての未来展望の発達 大阪教育大学紀要 (第IV部門), *34*(1), 61-70.
- 白井 利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, *65*, 54-60.
- 白井 利明 (1997). 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 白井 利明 (2001a). 青年の進路選択に及ぼす回想の効果—変容確認法の開発に関する研究 (I)— 大阪教育大学紀要 (第IV部門), *49*(2), 133-157.
- 白井 利明 (2001b). 希望の心理学 講談社
- 白井 利明 (2008). 時間的展望と自伝的記憶 佐藤 浩一・越智 啓太・下島 裕美 (編) 自伝的記憶の心理学 (pp.138-148) 北大路書房
- Shirai, T., Nakamura, T., & Katsuma, K. (2012). Time orientation and identity formation: Long-term longitudinal dynamics in emerging adulthood. *Japanese Psychological Research*, *54*, 274-284.
- Simons, J., Vansteenkiste, M., Lens, W., & Lacante, M. (2004). Placing motivation and future time perspective theory in a temporal perspective. *Educational Psychology Review*, *16*, 121-139.
- 園田 直子 (2003). 大学生の進路決定と現在指向 久留米大学心理学研究, *2*, 63-70.
- Stephen, J., Fraser, E., & Marcia, J.E. (1992). Moratorium-achievement (MAMA) cycles in lifespan identity development: Value orientations and reasoning system correlates. *Journal of Adolescence*, *15*, 285-300.
- Stolarski, M., Matthews, G., Postek, S., Zimbardo, P.G., & Bitner, J. (2014). How we feel is a matter of time: Relationships between time perspectives and mood. *Journal of Happiness Studies*, *15*, 809-827.
- Stolarski, M., Vowinckel, J., Jankowski, K.S., & Zajenkowski, M. (2016). Mind the balance, be contented: Balanced time perspective mediates the relationship between mindfulness and life satisfaction. *Personality and Individual Differences*, *93*, 27-31.
- 杉村 和美 (2005). 関係性の観点から見たアイデンティティ形成における移行の問題 梶田 叡一 (編) 自己意識研究の現在2 (pp.77-100) ナカニシヤ出版
- 杉村 和美 (2008). アイデンティティ 日本児童研究所 (編) 児童心理学の進歩2008年版 Vol. 47 (pp. 112-137) 金子書房
- 砂田 良一 (1979). 自己像との関係からみた自我同一性教育心理学研究, *27*, 215-220.
- Sword, R.M., Sword, R.K.M., Brunskill, S.R., & Zimbardo, P.G. (2014). Time perspective therapy: A new time-based metaphor therapy for PTSD. *Journal of*

- Loss & Trauma*, 19, 197-201.
- Taber, B.J., & Blankemeyer, M.S. (2015). Time perspective and vocational identity statuses of emerging adults. *Career Development Quarterly*, 63, 113-125.
- Teahan, J.E. (1958). Future time perspective, optimism, and academic achievement. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 57, 379-380.
- 都筑 学 (1982). 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, 30, 73-86.
- 都筑 学 (1993). 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41, 40-48.
- 都筑 学 (1994). 自我同一性地位による時間的展望の差異—梯子評定法を用いた人生のイメージについての検討— 青年心理学研究, 6, 12-18.
- 都筑 学 (1999). 大学生の時間的展望—構造モデルの心理学的検討— 中央大学出版部
- 都筑 学 (2007). 時間的展望の理論と課題 都筑 学・白井利明 (編) 時間的展望研究ガイドブック (pp.11-28) ナカニシヤ出版
- 都筑 学 (2008). 小学校から中学校への学校移行と時間的展望—縦断的調査にもとづく検討— ナカニシヤ出版
- 都筑 学 (2011). 時間的展望の発達 子安増生・白井利明 (編) 発達科学ハンドブック 第3巻 時間と人間 (pp.293-305) 新曜社
- 魚谷 雅広 (2002). ハイデガーにおける死と自己の問題—「存在と時間」を中心に— 哲学・思想論叢, 20, 13-23.
- Vowinckel, J., Westerhof, G.J., Bohlmeijer, E., & Webster, J. (2015). Flourishing in the now: Initial validation of a present-eudaimonic time perspective scale. *Time & Society*. Advance online publication. doi: 10.1177/0961463X15577277
- Wallace, M. (1956). Future time perspective in schizophrenia. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 52, 240-245.
- Worrell, F.C., Mello, Z.R., & Buhl, M. (2013). Introducing English and German versions of the Adolescent Time Attitude Scale (ATAS). *Assessment*, 20, 496-510.
- やまだ ようこ (2000). 人生を物語ることの意味—なぜライフストーリー研究か?— 教育心理学年報, 39, 146-161.
- Zimbardo, P., & Boyd, J. (1999). Putting time in perspective: A valid, reliable individual-differences metric. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 1271-1288.

(2016年8月26日受稿)



## ABSTRACT

Time perspective during adolescent and emerging adulthood development:  
A review

Ryo ISHII

The current study is a review of time perspective studies in adolescence and emerging adulthood. Time perspective was first conceptualized by Lewin (1951), and was involved in field theory. It is defined as “the totality of the individual’s views of his (or her) psychological future and psychological past existing at a given time.” It has been thought that time perspective has an effect on the present behavior of an individual. Since the time that this theory was first introduced, research has increased on various topics related to this concept, especially in the area of clinical, motivational, and developmental psychology. Adolescence and emerging adulthood are critical periods for time perspective, because time perspective develops in these periods, and the developmental tasks associated with these periods are closely related to time perspective. Many studies have examined the relationship between time perspective and identity, which is the developmental task in these periods, and have revealed a relationship between future orientation and positive attitude toward time, and identity achievement. However, previous research has not specifically investigated the identity formation processes. In addition, the focus of previous research concerning time perspective has been biased towards future time. Because of this, it is imperative that future research focuses on both the identity formation process and product, with emphasis on not only the future, but also the past and present as well. Finally, previous research has not paid appropriate attention to time perspective until the death of the individual. The perspective of time, based upon the finiteness of life, can certainly influence adolescent and emerging adult development. Thus, future research should examine this issue further

Key words: Time perspective, Adolescence, Emerging adulthood, identity